



言語聴覚学科におけるPBLとReflective (自省的)モデルによる feed back を用いた自主的学びの効果の検討

1 はじめに

平成24年3月に「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」と題する中央教育審議会大学分科会大学教育部会の審議まとめ(2012)が報告されています。これによると、グローバ

ル化や少子高齢化など急激に社会が変化する中、将来どのようなことが起こるか予測困難な時代を生きている学生に、大学が、「生涯学び続け、どんな環境においても“答のない問題”に最善策を導くことができる能力」を育成することを求めています。

この審議まとめを読み、入学する8期生の言語聴覚学科学生にどのような教育目標を持ち関わっていけばいいのか考えました。時代だけではなく、人の人生は予測困

難です。言語聴覚士になることを希望して入学し、国家試験に合格すれば職業だけは予想できますが後は自分の努力次第です。どのようにも、人生を切り開けます。

希望をもって切り開いてほしいと切望しました。私はこの願いを持ち、かつ生涯学び続け、主体的に考える力を育ててほしいと思いました。

目白大学言語聴覚学科に入学してきた学生はとても素直で優しい人が多い印象があります。教員の指導を素直に受け入れてくれます。教員としては嬉しいのですが、これだけでいいのかな？と疑問に思う時があります。おそらく納得して理解して受け入れているならいいのですが、不満に思いながら「仕方ないか」ということになっていないかと心配です。自分の意見を出して、教員と話し合いながら折り合いをつけることは社会に出ても必要な能力です。これを培ってほしいと思いました。それには、まず、人の意見を聞く、その意見を自分なりに考える、自分の意見を言ってみる、人の意見を聞くというやり取りの繰り返しを経験することが役に立つと考えました。

また、入学時の面接では医療職希望の志望動機として「人に役に立ちたい」とすべての学生が言います。大切

に育てたい崇高な志です。しかし、入学後、様々な役割をお願いすると多くの学生は自分には関係ないような表情で消極的で、自ら志願してくれません。就職してからも様々な役割を担うはずで、責任感を持って役割を果たす練習とともに、人の役にたったという実感を持ち、巣立ってほしいと思いました。そこで、教育目標として以下の一般目標を立てました。

- (1) PBL (Problem Based Learning) を多く取り入れ、自ら学び、自ら考える態度を形成する。
- (2) 学生との話し合いにおいて、学生が自分の意見を表現する。
- (3) ボランティア活動、学科活動、学級活動、グループ活動を積極的に行い、役割を担う。

2 目標達成のための方法

- (1) 1年次は基礎ゼミ、ならびに言語聴覚障害演習でPBLを実施しました。グループ学習を始める前に、学生が気を付けることを話しました。図1に講義時に

| | | |
|---|---|--|
| <p>問題解決学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で疑問を持ち、自分で勉強する態度 グループ学習へ積極的に参加 自分の考えを人に伝える言語能力 生涯にわたって自分を高めることのできる言語聴覚士を目指そう <p>↓</p> <p>自分が食べるものは自分で調達 1ヶ月分食料を持たせる祖父 食べ物調達方法を教えた祖父</p> | <p>学習の進め方</p> <p>シナリオを読んで何を解決すべきか? そのために何を知るべきか? グループで議論する</p> | <p>能動学習のルール</p> <p>知識を持たせて卒業→自立して生きる力を備えて卒業してほしい</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己管理→自分を律する。仲間との協調。向上心を持って取り組む 自覚ある大学生へ→約束を守る。礼節を保つ。相手を思いやる。 社会人としての自覚を持つ→言語聴覚士に必須 |
| <p>参加にあたって</p> <p>全員が積極的に参加する グループ討論の時に教科書を読む必要はない 自分で疑問を作り、自分で答えを作る</p> | <p>リーダーの役割</p> <p>リーダーの仕事 意見をまとめる、議論を活発に、思考を深める</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 全員に疑問点や意見を求める ② 出て来た疑問点の相互関係と仮説を考える ③ 次回までに学習してくることを確認・整理する ④ グループ内の発表の司会 | <p>記録係りの役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボード3つの要素 発言のメモ、意見の仮集約、議論の方向性を示す コツ1 意見を集約しつつ記入する 内容的に近似している物は近くに コツ2 理解を助ける工夫をする 記載事項の空間配置を工夫し、視覚的に訴える コツ3 一般用語は専門用語に変換する(逆も) 発言の内容をそのまま記載せず、専門用語に |

図1 グループ学習前の講義スライド

表 1 アンケート結果

| | プラスの意味 | どちらでもない | マイナスの意味 | 無回答 |
|---|--------|---------|---------|-----|
| 1年生の時やその後の授業でグループ学習を多く実施したが、グループ学習(自分で調べることも含む)をどう思うか | 78% | 5% | 14% | 3% |
| グループ学習でどの程度参加できたと思うか | 64% | 11% | 22% | 3% |
| グループ学習はあなたの学習にどのような影響を与えたか? | 89% | 8% | 0% | 3% |
| 担任とのfeedbackにおいて、多くの場合、担任は「あなたはどう思いますか?」と皆さんの意見を聞くことから始めましたが、このことをどう思うか | 89% | 11% | 0% | 0% |
| 1年次のボランティア活動において積極的に参加した人を表彰しましたが、このことをどう思うか | 58% | 42% | 0% | 0% |
| 自分は4年間の学びで主体的に学習できたと思うか | 89% | 5.50% | 5.50% | 0 |

用いたスライドの1部を示します。スライド作成に当たり、PBLチュートリアルガイド(吉田他、2006)¹⁾、チュートリアルシステム コア・タイム(丹羽他、2005)²⁾を参考にしました。自主的に学習する態度を形成すること、グループ内で協動的に行動すること、役割を果たすことが授業の目的であると伝えました。この3つは一生役に立つことであるということ、老子の言葉「授人以魚 不如授人以漁」(日本語では「人に魚を与えれば一日で食べてしまうが、釣りを教えれば一生食べていける」)にたとえ学生に話しました。学生が卒業し、言語聴覚士になっても必要であるし、仮にどのような生き方をしても役に立つと考えたからです。

(2) 言語聴覚学科では、担任として1年に最低2回は個人面談を行います。また、演習やオスキーで学生の態度を評価した時は必ず個別にフィードバックをします。このフィードバックの時に教員の感想や意見を伝える前に、学生の意見を必ず聞きました。この方法を取り入れたのは、有効なフィードバックのうち、よく使われているものはReflective(自省的)モデル(Bullock, I. et al, 2008)³⁾であることや、自己評価が最も強力な評価方法である(Whiteman, N. et al, 1997)⁴⁾ことが示されているからです。その後、教員の意見を伝えました。

(3) ボランティア活動や学科活動に積極的に取り組

み、奉仕の精神を学び、自分の存在意義を強く感じ、大学への帰属意識を育てるために、大学内で様々な係りの担当を決めるときは学生の自主性に任せました。〇〇の係りに担当を決めなければならない時、教員が学生に係りを依頼するのではなく、学生が自主的に申し出るまでずっと待ちました。また、多くの学生に役割を担ってほしいので、役割を1回担った学生は次に役割を担えないルールを作りました。自主的にもっとやりたいと思う学生の妨げになる可能性があります。その学生はすでに主体性を身に付けているので、より自主性が少ない学生のために機会を作りました。また、係りやボランティア活動に積極的だった学生を年度末に表彰しました。

3 評価の方法

今回の評価も難しいものでした。自ら学ぶ態度が形成できたか? そうである学生もいるが、そうではない学生もいる。しかし、私が知らないところで一生懸命学んでいるかもしれない。教員として評価に窮します。そこで、学生に自由記述で自己評価してもらおうことにしました。学生は平成25年に入学した36人です。平成29年3月に卒業予定と30年卒業予定の学生です。表1の6つの問

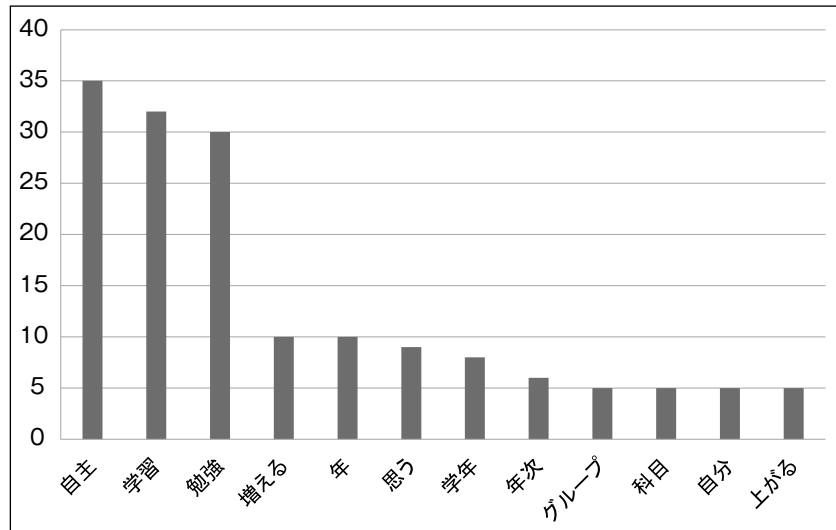


図2 主体的に学習できたかの出現語彙数

いと「4年間で一番頑張ったことは何ですか?」という問いによるアンケートを無記名で実施しました。結果の分析にあたり、質問に対してプラスの意味を持つ回答か、どちらでもないか、マイナスの意味を持つ回答かで評価しました。評価者は筆者、言語聴覚学科助教1名、事務職員1名の3名で2名以上の判断を採用しました。また、語の頻度と関連性はKH-Coderを用いて分析しました。

4 結果

アンケートを配布できた学生36人が全員回答しました。表1に結果を示しました。グループ学習は78%の学生が他者の意見を聞くことが出来た、多くの人と関わることが出来た、自分で調べることで学習効果が上がる、学習の習慣がついたなどプラスの意味に捉えていました。一方、協力しない人を参加させるのが大変だった、学生の意見は正確ではなくグループでの意見交換は意味がないとするマイナスの意見が14%でした。自分が積極的にグループ学習に参加できたかのプラスの意味は64%で、グループのメンバーによるを代表意見とす

るどちらでもないが11%、積極的に参加できなかったが22%でした。グループ学習が与えた影響では、一人で学習するより知識が補えた、学習の仕方を教えてもらった・学習の方法が分かった(28%)、学習に対する意欲が向上した(25%)、説明の仕方を工夫するようになった、交友関係が広がったなどプラスの意味が89%でした。何も影響はなかったと応えた学生は8%でした。担任との話し合いやフィードバックでまず、学生の意見を述べてもらうことに対しては、自分の考えが整理できた・自己フィードバックする癖がついた(40%)、話しやすい環境・自分の意見が出しやすかった(28%)、自分と教員の意見の差が確認できた(22%)、教員が身近に感じたなどプラスの意味が89%でした。特にないが8%でした。ボランティア活動や大学の役割を積極的に行った学生を表彰したことに対して、58%の学生が「いいことだ、行動を認めてもらえた、次の活動への意欲が向上した」とプラスの意味に感じていました。1年次しか表彰しなかったため、忘れてしまった学生が42%でした。最後に4年間の学習で主体的に学習できたと思う学生は89%でしたが、中でもグループ学習で自主的な学習習慣が身についたと応えた学生は17%でした。ほとんどの学生は学年が進むにつれて自主的に学習するようになったと応えています。変わらない、自主的に学習

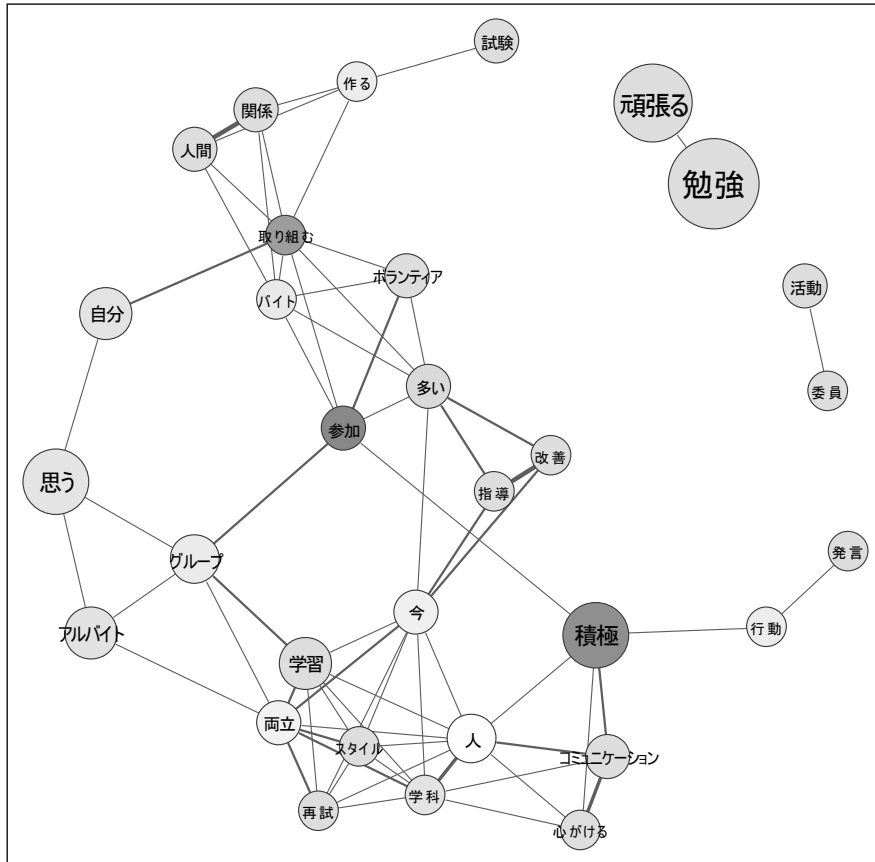


図5 4年間で一番頑張ったことの出現語彙の関連性

できないと答えた学生は55%ずつでした。

アンケート問3グループ学習が与えた影響の出現語彙を図2に語彙の関連性を図3に示しました。図2の最低出現語彙数は5語としました。布置される単語の数は30でした。

最後に4年間で1番頑張ったことに関して、語彙の出現数を調べたところ図4の結果でした。図4の最低出現語彙数も5語としました。布置される単語の数は32でした。語彙の関連性を図5に示しました。

語のネットワーク図では、出現数が多い語は大きい円で、語の関連性が強いほど円を結ぶ線が太く、多くの語と関連がある語は円の色が濃く表されます。

5 考察

(1) グループ学習の効果

主体的に学ぶ態度を形成してほしい意図をもって教育目標としてPBLによるグループ学習を取り入れたことは学生の意見からは、効果があったと考えられます。アンケートの問1、問3の回答から4年間、主体的に学習できたと感じている学生は多く、グループ学習がその要因であったと指摘した学生もいました。また、グループ学習により、学習の習慣がついたり、他者の学習の方法から学んだり、他者が学習する様子を目の当たりにして自分の行動を調整したりできたようです。図3の語の関連性では「自主的」、「学習」、「勉強」の出現頻度が高

く、これらの語が1つのグループを形成しています。また、閉じたネットワークになっていることから、多くの学生が自主的に学習、自主的に勉強をするようになったと感じています。さらに、「する」、「できる」の頻度も高く、学習だけではなく、自主的にする、できると自己評価しており、このことから、学生自身が主体的に学べた、主体的に行動できたと感じていることを示しています。

さらに、もう一つのネットワークでは「興味」、「進級」、「専門」の円が濃い色になっており、これらの言葉が色々な単語と結びついて出現していることを示しています。興味は意欲、評価、刺激、見つけると関連しており、学生の興味が意欲を高めたり、刺激になったりし学生にとって生活へ良い影響を与えたと推測できます。進級は学生それぞれが、様々な興味について述べていたり、見つけていたりするという傾向を示していると考えます。また、「進級」は増える、専門、機会、科目と関連しており、科目の専門性と進級が関連していることを学生が意識しており、このような要因も自主的な学習を支えている要因であると推論しました。

しかし、グループ学習に積極的に参加できたかはグループのメンバーに影響されたり、積極的に参加できなかったとする学生もいました。筆者もグループメンバーによる影響を考え様々なグループ構成を考えました。意見を積極的に言える学生、おとなしい学生を同じメンバーにするとおとなしい学生はなかなか意見を言えなかったり、まとめ役になれなかったりします。そこで、同じようなパーソナリティの学生をグループのメンバーにすると、おとなしい学生は意見が言いやすいようで、そのグループで自信をつけ、全員の前でも少しずつ意見が言えるようになった学生もいます。

4年間一番頑張ったことでも「勉強」「積極的」の出現数が一番多く勉強を頑張ったことがわかります。ネットワーク(図5)では「勉強」「頑張る」が大きいネットを作っており、出現語彙と同様の結果です。他のネットワークでは「積極」「参加」「取り組む」の円が濃い色になっており、他の語と結びついて出現しています。「積極」の周りにある言葉には「コミュニケーション」、「人」、「参加」、「行動」があり、学生が積極的に人とコ

ミュニケーションを取ろうとしたり、積極的に参加したり、行動したりしたことを示していると推察できます。「参加」の周りにはグループ、バイト、ボランティア、「取り組む」の周りには人間、関係、自分、作る、バイト、ボランティアと、どちらも学生自らが行動を起こすこと、コミュニケーションを円滑に行うための努力をしていると捉えられます。

(2) 学生の意見優先の効果

学生との話し合いで、学生の意見をまず聞くことは自分の考えが整理できたり、自己フィードバックの習慣がついたとする学生が多かったです。しかし、主体的な学びに直接的に影響を与えたかは今回の結果から明らかとはなりません。ただ、自己評価できる、自己フィードバックできることは言語聴覚士にとって重要な態度を形成できたと考えます。学生の意見を聞くことは、学生は意見が言いやすかった、言いやすい環境を作ってくれたと述べており、自分から教員に積極的に意見が言いにくいことがわかります。そのために、学生に伝えたいことがあっても、まず学生がどのように考えているのかを尋ねることは、学生の気持ちを知るだけではなく、教員の意見も学生に吸収しやすい状況を作るようです。学生と話した時に、多くの場合、学生は教員が言いたいことをきちっと把握していることがわかりました。学生が言ったことを教員が肯定すると納得できるようです。思いがけない意見でしたが、教員が身近に感じた学生もあり、学生との信頼関係を形成することに寄与したかもしれません。

(3) 学生の行動の表彰効果

ボランティア活動、学科活動、学級活動を積極的に行った学生を表彰しましたが、1年生の時に1回実施しただけでしたので、忘れていた学生もいました。少数でしたが表彰により自分の行動が認められたと思う学生や行動意欲を向上させた学生もしました。たびたび賞賛したり、表彰したりすればと反省しました。ボランティアによりいろいろ学ぶことがあり、積極的に参加することで主体的な学びに繋がると考えます。卒業してからもますますボランティア活動や職場の役割に積極的に参加してほしいと思います。

最後にあと数ヶ月で4年間の学びを終了する学生です

が、学年が進むにつれ主体的に学習するようになったと答えた学生が90%いたことにほっとしました。学習だけではなく今後の人生を主体的に生きてほしいと願っています。

参考文献

- 1) 吉田一郎(編集)、大西 弘高(編集)：実践PBLチュートリアルガイド、南山堂、2006
- 2) 丹羽雅之他(岐阜大学医学部教育開発研究センター)：チュートリアルシステム コア・タイム、三恵社、2005
- 3) Bullock, I. et al.：医学教育の教え方ポケットガイド 松村理司他訳、西村書店、2010
- 4) Whitman, N. et al.：臨床の場で効果的に教えるー「教育」というコミュニケーション、伴信太郎他監訳、南山堂、2002